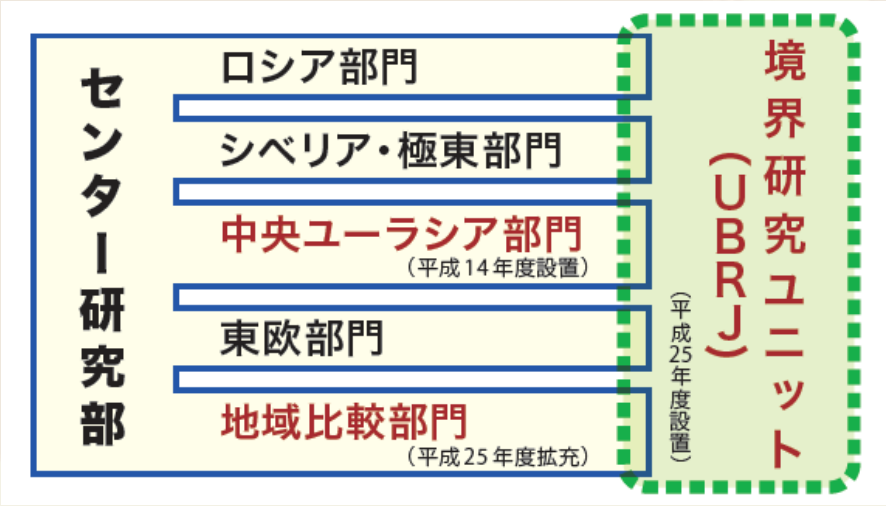
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

- 1955年設立。旧ソ連・東欧地域に関する日本唯一・世界有数の総合的研究機関
- 政治、経済、国際関係、歴史、文学・文化、言語、人類学をカバー理系とも連携
- 社会主義圏崩壊直後から徹底した現地調査による研究スタイルを確立
- 日・英・露語での成果出版：4種の査読制雑誌発行、海外一流出版社から論集刊行
- 共同利用・共同研究拠点第2期期末評価：S（最高点）



グローバルかつ実践的な研究活動

- 1980年代から毎年国際シンポジウムを開催（現在は年2回以上）
- 日本の研究の国際化を先導、世界的な学界統合を推進：
  ・スラブ・ユーラシア研究東アジア会議を中韓などと持ち回り開催
  ・国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）世界大会（2015年8月、幕張）を実施
- 政策提言・社会連携：北方領土などの国境問題、旧ソ連・東欧の災害（チェルノブイリ他）と東日本大震災の比較、2008年グルジア紛争や2014年ウクライナ問題の解説

具体的な活動状況　1

・夏・冬の定例の国際シンポジウム

2016年夏「ロシア極北：競合するフロンティア」

参加者178名、うち外国人68名

2016年冬「体制転換から4半世紀：

ポスト共産主義社会の多様性を比較する」

参加者130名、うち外国人33名

・定例以外の国際シンポジウム

2016年度は以下のものを実施

「スラブ諸語における標準語イデオロギー」

「流動する北東アジア：紛争か、協力か」

具体的な活動状況　2

・国際的な査読学術誌2冊の刊行

Acta Slavica Iaponica：

スラブ・ユーラシア全般を対象

海外からも多数の投稿

最新号vo.38では

外国人の論文・資料8本、書評2本を掲載

Eurasia Border Review：

ユーラシアの「境界」問題を扱う

世界初の雑誌

最新号vol.7, no.1では特集を含めて

外国人の論文5本を掲載

具体的な活動状況　3

・外国語での多くの出版

“Slavic Eurasian Studies(SES)” Series

2004年からこれまでに31冊を刊行

“Comparative Studies on Regional Powers”

2009年からこれまでに14冊を刊行

外国語での商業出版も多数(Routledgeなど)

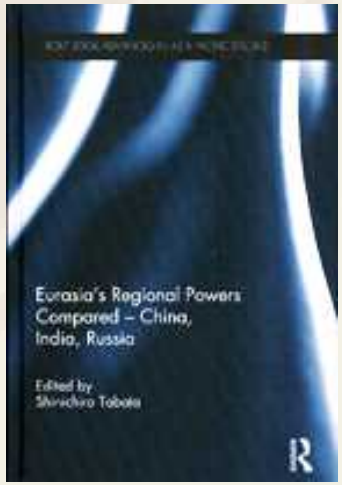
・外国人客員研究員

大学経費により毎年6～10名を採用

3ヶ月から1年程度の滞在

毎年多数の応募(多い時で100を超える)

著名な研究者の参加＋若手キャリア支援



海外研究機関との学術交流協定

■大学間交流協定

1. オウル大学
2. タルトゥー大学
3. ブダペスト工科経済大学
4. モスクワ国立大学
5. イルクーツク大学
6. サハリン国立大学
7. 極東国立総合大学
8. ベオグラード大学
9. ロシア北東連邦大学

■部局間交流協定

10. ロシア科学アカデミー極東支部
    極東諸民族歴史・考古・民族学研究所
11. 黒龍江省社会科学院
12. 中国社会科学院
    東欧・ロシア・中央アジア研究所
13. 国立カザニ・エネルギー大学
    経済学・社会工学研究所
14. ロシア科学アカデミー 東洋学研究所
15. ロシア科学アカデミー スラブ学研究所
16. ライデン大学 東欧法律・ロシア研究所
17. フランス国立東洋語東洋文化研究所
    ロシア・ユーラシア研究センター
18. オックスフォード大学セント・アントニーズ校
    ロシア・ユーラシア研究センター
19. ハーバード大学ロシア研究センター
20. ロシア科学アカデミー ロシア文学研究所
21. カルムイク国立大学

国際的な研究活動推進に際しての問題

・国際シンポジウム
　ロジスティック面の手配の負担＝事務業務の増加
　科研費での費用の工面＝研究遂行費の減少

・学術出版
　専任編集者の欠如＝教員が編集作業を担当

・ 外国人研究員の招聘
　北大では全学対応＝手間の増加＋不合理な評価
　生活支援の不十分さ＝部局対応が不可欠で業務増

☆さらなる研究の国際化＝
　　研究支援体制の強化が不可欠？